

チベット亡命社会における仏教の近代化

高松 宏 寶

(クンチョック・シタル)

一 はじめに

二十世紀初頭より、アジア全域にわたって政治と社会の大きな変革が起こり、ヒマラヤの国々の中でも特にチベットは、ヨーロッパの植民地政策と中国の共産主義的な革命の影響を一番大きく受けた。そのために、チベットは内外から変化を求められ、改革と近代化を迫られることとなった。すなわち、対外的にはそれまでのような鎖国状態ではいられなくなり、民族の中からも、国家の政治と仏教団体との関係において、変化の兆しが起こった。

そうした時代にあつて、ダライ・ラマ十三世（一八七六―一九三三）は優れた政治家であり、仏教学者であり、国家とチベット仏教の未来を考えることができる人物であつたと言える。当時、チベットの国家と政治においては、三大寺（セラ寺、デプン寺、ガンデン寺）をはじめとした寺院の関与が強力だったからである。彼自身、国

を変革しようと、国や仏教団体に対して積極的な提案を試みてきた。具体的には、『五箇条の宣言』の中に「宗派の別なく、各僧院の僧院長・教師・正式の僧侶〔比丘・比丘尼〕たちは、自分の宗派にもとづいて顕教と密教の教えの伝統を純粹に墮落させずに堅持し、刷新した上で勉強しなさい。儀軌、説法、聞法、および学習・思索・瞑想の三つにおいて努力し、自分が承諾した戒律などを厳守することを大切にすべきである。三種をはじめとして保持しなさい。政治活動や商取引に対するよりもむしろ、互いに尊敬しあつて、精神的、教育的な伝統を維持するよう心がけるべきである。」⁽¹⁾と示している。チベットにおいては、変革が必要な状況だったのだ。

ダライ・ラマ十三世は、政治的圧力により二度ほどの短い亡命生活を経験した。最初は、一九〇四年のイギリスによるラサへの侵略における、外モンゴルへの亡命である（一九〇四～一九〇九）。そしてその後、今度は中国からの侵略により、インドで三年間の亡命生活を経験した（一九一〇～一九二二）。それらの時期にダライ・ラマ十三世は、世界の政治情勢や社会変化および近代化について、多く見聞し体験したと思われる。例えば、外モンゴルへの亡命中には、ソビエト・ロシアの影響下におけるモンゴル共産主義による仏教教団に対する弾圧を見たことで、将来のチベットについてもある程度予測がついたのではないかと考える。

またインド亡命中には、イギリスを含めたヨーロッパ諸国によるヒマラヤの国々への関心と、西洋的視点における政治的認識、すなわちヨーロッパの考える国際政治の概念を十分に学んだ。このことにより、ヒマラヤの国々は、ヨーロッパ諸国の影響を非常に受けやすい立場にあることを理解したのである。まさに、イギリスから目を覚まさせられた思いであつたらう。

それまでのチベットと中国は、チューユンの関係にあつた。チューユンとは、チベット仏教文化圏にあるチベット、中国、モンゴル間の応供処（ダライ・ラマやパンチェン・ラマなど）と施主（満州やモンゴルなど）の関

係を意味する。僧侶は説法や、国家および皇帝のために儀礼を行い、施主は軍事的支援を含めた援助を行うという、相互に支え合う関係のことである^②。しかし、このような仏教に基づく友好的な関係も、以後は国際的な政治的側面から解釈しなければならないことは、十分に認識できたと推察する^③。そういう意味で、ダライ・ラマ十三世を含め近代的な教養がある人たちは、チベットは既存の状態ではいられないと考えた。こうしてダライ・ラマ十三世は近代化の政策（農地解放、近代軍事制度の確立、仏教の勉学と戒律の嚴格化など）を試みたが、政府内の貴族たちと、巨大なエリート系仏教団体が変化を恐れたこともあり、必ずしもスムーズには運ばなかった^④。ダライ・ラマ十三世は、こうした改革を比較的若くして打ち出したが、実行できずに遷化した。

二 ダライ・ラマ十四世亡命の経緯

次の十四世はチベットの伝統にならない、十六歳で政治と宗教の指導者として認定されることとなった。

しかしチベットは、ダライ・ラマ十三世が目指した近代化を進めることもできず、国際的に一国としての存在を認められることもないままに、二十世紀中頃に独立と自由を失ってしまう。この変化の中でダライ・ラマ十四世も後にインドへ亡命することとなる。

この亡命の背景には、ヒマラヤ周辺の国際情勢の変化がある。二十世紀の中頃、ヨーロッパによるアジア植民地支配の時代が終焉を迎えたところで、一九四七年にイギリスも撤退してインドが独立を果たした。実際はこのインドに居たイギリスこそ、共産主義の中国とロシアにとって敵対関係にあったのだ。

中国にとっては、脅威であるイギリスの存在がなくなり、さらに一九一二年から始まった内戦も終わり、毛沢東の共産党が大幅な勝利を果たした。またチベットの北に位置するロシアは、中国共産主義の勢力拡大に対し協

力的な態度を示したのである。その結果、毛沢東の政策により中国共産党は、ヒマラヤの国々に侵略政策をとつた。その中で、それまで中国と友好的な関係にあったチベットにも軍事力が及ぶこととなったのである。⁽⁵⁾

しかしダライ・ラマ十四世とラサ政府は、一九四九年から五九年まで十年間、お互いの主張を尊重した上で、できるだけ平和的な交渉による解決へと努力した。しかし、中国側が毛沢東の思想として持っている主張と、実際に行われた軍事介入は矛盾しており、特に東チベットにおいては宗教的弾圧が強く、ラサ政府がいくら平和的交渉を試みようとしても問題は解決することができなかった。一九五一年の十七条協定はダライ・ラマの意志無しに締結され、チベットの国民感情は高まり、あらゆる所で戦争状態に入ってしまった。そして最終的に一九五九年三月、ラサの武装決起ではポタラ宮の周囲に三万以上の人々が集結し、事態を収束することが不可能となった。多くの犠牲が生じることを避けるために、ダライ・ラマ十四世は、一時的にラサから脱出することを決心した。

十四世自身は、本当はできるだけ死亡命せずチベット内で、中国共産政府と平和的解決に向けてコンセンサスをとるつもりだった。なぜなら、中国側がチベットに軍事介入することには否定的だが、彼らの主張している「チベットの改革と近代化のための手助けをする」という主張については、十四世も賛成であり共通目的と捉えることができたからだ（「We enjoyed a common principle」⁽⁶⁾）。近代社会に向かうことと、仏教教団などに対して改革や近代化をもたらしたいということを、大いに希望していたのである。いずれにしても、以前のままに鎖国状態ではいられないということは、認識していた。そういう意味で、チベット仏教のために改革や近代化をもたらす手段として、十四世自身がチベットに残るか亡命するかは、難しい判断になったと思われる。

しかしチベット人と人民解放軍との間に大きな衝突が起これば、チベットにとっては致命的とも言える大きなダメージを受けることになる。従って最終的には亡命を選択したのだ。この亡命は、アメリカの協力とインド政

府の合意のもとに遂行された。

一九五九年三月、十四世とおよそ八万五千人の人々が、ヒマラヤを越えてインド、ネパール、ブータン、シッキムへと亡命することとなった。このことは、アジアにおける大きな亡命問題となり、新たな歴史を歩む契機となった。

三 亡命社会の形成

(1) 生活基盤

一九五九年四月に、ダライ・ラマ十四世とその後を追ったチベット人たちは、インド、ネパールなどに亡命を果たし、亡命社会を形成することになっていく。亡命は成功したが最大の問題は、これらの人々をいかに住まわせるかということである。この問題に関して、ダライ・ラマ十四世は直接ネルー首相と相談し、その結果、首相をはじめとしてインドの指導者たちと、インド政府が積極的に協力して、動くこととなった。

亡命社会における課題を解決するためには、主には三つの問題が挙げられた。

第一は、十万人以上の亡命チベット人をどこに住まわせるかということ。第二は、若者のための教育をどのようにするかということ。第三は、チベット仏教と文化を守るための教育施設と、僧侶の生活をどのようにするかということである。

チベット人にとっては、第三の問題が長い面では非常に重要であるが、この件は宗教的な側面であるため、インド政府にそこまでの協力は期待できなかった。

まず、第一の問題を解決するために、ネルー首相主動のもと、主には南インドに十カ所以上の難民キャンプが

形成された。⁽⁷⁾一九七〇年頃までに三万人以上の居住地と、生活基盤を整えるための農地として開墾すべく土地が提供された。またインド政府は、難民居住地建設のために組織 (Central Relief Committee for Tibetan Refugees) を設け、ヨーロッパなどの支援団体からさまざまな援助を募って各地に分配した。特に、農業経験のない人々に対しては、デンマークやノルウェー、スイスなどのヨーロッパの支援団体によって農業指導と、技術教育が行われた。そして後には、国際NGO組織オイスカ (OISCA) や、成田山新勝寺をはじめとして、日本からも教育支援などの援助が加わった。

こうして、一九八〇年代までに六万人の生活基盤が形成されると同時に、インド政府とヨーロッパの支援団体は、チベットの伝統的技術・技能がある人々に対しては、主には北インドに絨毯工場等を建設するための援助を行った。⁽⁸⁾これらは後に、ダライ・ラマ十四世の御居所であるダラムサラに拠点を置く亡命政府が指導を担当することとなる。

こうした難民居住地は、基本的にチベット亡命社会の基盤となり、人口も増加していった。そして、このようなシステムは、ネパールやブータンにも展開されていった。

(2) 子どもたちの学校について

亡命してきたチベット人は、子どもたち (十四歳以下) に教育を受けさせることは、未来のチベットにとって非常に重要なことと考えていた。これは、ネルー首相が「あなたの民族に近代の教育を受けさせることは重要である⁽⁹⁾」と、ダライ・ラマ十四世に直接アドバイスしたこともきっかけとなっている。学校建設についてはインド政府も積極的で、教育省の中に独立的な組織 (Tibetan School Society) を作って取り組んだ。北インドを中心

として一九六〇年から七〇年までの間に、チベット人だけのために五百人規模の七、八つの学校と、六カ所程のデイスクールが建設された。当初は、六千人程度の子どものための学校が建設され、その後一九七〇年代には九千人程度、八〇年代には一万五千人以上の子どもが近代教育を受けることができるようになった。¹⁰⁾

ダライ・ラマ十四世は、ネルー首相と相談のうえ、チベット人だけの学校を作ること強く願った。そこには二つの目的があった。一つは、科学、数学、社会学などの現代教育を英語で受けることができること。二つ目は、これらの子どもたちにチベットの宗教、歴史、伝統的な文化、語学を徹底的に教育することであった。将来にわたりチベットのアイデンティティーが失われないようにと強調した結果、チベット人のための学校建設はインド政府の直接指導の下で行われ、問題が解決されることにも繋がったのである。そして、これらの学校を卒業した子どもたちが、チベット亡命社会の基盤を築き、近代化を進めていくこととなる。

(3) 仏教施設の再建

仏教寺院の再建と僧侶の生活を整えることは、チベット亡命コミュニティとダライ・ラマ十四世が一番重要な職務として考えてきたことは事実である。だからダライ・ラマ自身も特に関心を持ったことであり、特別な使命でもあった。なぜなら、チベット本土においては、完全な共産主義の方針とイデオロギーによってチベット仏教の伝統と文化が弾圧を受けて消滅の危機に瀕することは明らかであり、それは非常に惜しまれることだからだ。それは、チベットのアイデンティティーが消えていくことと同じである。従って、ダライ・ラマ十四世亡命の目的は、単に命を守るためや自由のためだけではなく、チベットの民族のアイデンティティーと、これからの社会に貢献できるであろうチベット仏教文化の特長を守るためでもあった。かつて、鎖国をしてまで外部との交流を

止めたのは、チベットにおいて伝えられてきた釈尊の教えである仏教を、可能な限り純粹に守ろうとしたからである。その伝統をここで終わらせたくはなかったのだ。

こうした意味においては、チベットの仏教と文化を保存することは、亡命社会の特別な責任でもある。チベット仏教の教えとそれに関係する文化と伝統を亡命社会において維持することと、時代に合わせて改善することは自由な社会だからこそ出来ることなのだ。

この件における十四世の考え方を示すと、亡命社会について具体的に著したアメリカ人ジャーナリストであるジョン・F・アドベンは「チベット文明の根源たるチベット仏教こそが最優先権を持っていた。仏教が広まったアジアの他の諸国とは異なり、チベットは仏教教義の集大成を包含していた。顕教、密教、それに伴う儀軌。最も諸国とは異なり、危機的状况にあるのが師弟の相承系譜と、それに基づく口頭伝授だった。最後のものは世界の三大宗教の中で最も古い起源を持つ仏教が、その時から今に至るまで脈々と維持し続けてきたものである。六十万を数えた僧侶のうち、逃れてきたのはほんの七千名、四千余りもいた活仏に至っては数百名が脱出できたにすぎない。後に残った者たちは僧衣を脱ぐことを余儀なくされた……（中略）道路建設労働者として働いている学者が一人死ぬ度に、数世紀にわたって受けつがれてきた学問が失われてゆくことになる。そのためにダライ・ラマはこうした学僧たちを、俗人の同胞たちに先んじて、死に至る労働から解放させる緊急手段をとらざるをえなかった。」^①としている。

現実としては五千人以上の僧侶が亡命したという事実があるが、事の大小によらず、インド政府としては仏教施設を直接的に支援しにくい事情があった。それでも、僧侶を一人の難民としてとらえ、南インドに寺院建立のための土地を提供することは行った。しかし実際のところは、南インドなどで三大寺などを再建することや、仏

教の実践と研究の再開のためには、ダライ・ラマ本人をはじめ亡命政府と社会が直接行動するしかなかった。

このような経過を経て、南インドの三カ所ほどに伝統的な大きな寺院を再建することができ、南インドとインド全体で、五千人以上の僧侶の修行と生活のための寺院が建立された。そして一九八〇年代までには、チベットから逃れてきた長老や高僧および伝統的活仏の指導の下、信者たちの協力によって、約百五十の伝統的な寺院を再建することができた。

なお、このような仏教施設を建立することと、仏教の近代化を目指すにあたって、亡命社会では二種類の方向性が求められることとなった。一つは、これまでの伝統的な寺院の形体で、仏教の実践と教育を亡命社会に定着させること。そして二つ目は、「Research Institute」という、「学校」や「研究所」という新しい概念を持つ仏教施設の存在である。

四 亡命社会における仏教教育と学術研究

(1) 伝統的な寺院再建の現状

従来の三大寺における仏教の研究と実践方法は、十五世紀から続く大乘仏教を中心とした勉学方法であり、これが典型的なチベットでの勉強方法であった。問答形式で、すべて口頭で進めていく。論文の執筆や筆記試験などは特にない。

学習の内容としては、八世紀から十一世紀までのナーランダ大学で行われてきた勉学方法である。主には五つの科目（般若学、中観学、論理学、阿毘達磨俱舍学、律学）を中心とし、それらをすべてチベット語で、十五年から二十年ほどかけて学問的に勉強し、最終的にマスターしたところでゲシェーという博士号が授与される。ゲ

シエーの試験は、すべて問答形式で行うことが伝統的な方法であった。それは、根本テキストなどを暗記したうえで、ナーガルジュナ、チャンドラキールティ、アサンガ、ヴァスヴァンドウ、シャーンティデーヴァなどといったインドの学僧たちの著作を中心に勉強していくことである。チベット仏教徒は、これらインド大乘仏教を中心とした釈尊の教えの勉強と研究であると考えている。

なぜ口頭か、なぜ書かないかという点、ヒュー・リチャードソンの経験に基づいて著された『チベット文化史』には、「ほとんどの僧院では、規模の大小にかかわらず、約半数の僧侶が「学者」であったが、この言葉は今日の西洋でいう学者とはだいぶ意味が異なっている。その履修科目は、先に列挙したような、大蔵経に収録された顕教の文献を学ぶ五教科であり、この後で密教の専修課程に入る者もいた。ゲルク派の大きな施設、特にラサ三大僧院とタシルンポ僧院では、もっぱらまる暗記に重点が置かれ、書くこととノートを取ることは、実際に禁じられないまでも、好ましくないとされていた。習字とチベット語作文の学習は書記と役人がやることであり、そのため真の宗教的知識（体験）の獲得にはまったく有害であると見なされていた。」と記されている。⁽¹²⁾

ちなみに、チベットの寺院では僧侶の数は非常に多いが、出家したからといって必ずしもすべての僧侶がこれらの学問を専門的に学ぶということではない。

現在、南インドの亡命チベット社会の寺院でも、内容としては同じことを続けている。しかし時代に伴い、新しい制度への改革も試みている。このような改革や近代化は、チベット本土にいる頃から、知識人の意見として望まれているところはあった。ダライ・ラマ十三世自身もそうであったし、当時の学僧の中にも、チベット全体の改革とチベット宗教組織の改革を強く望んでいた人物も存在したのである。

その中の一人としては、アムド・ゲンドゥン・チュペル (dGe 'dun chos 'phel 一九〇三～一九五二) が挙げ

られよう。彼はアムドで出家し地元の寺院で勉強した後、さらなる仏教の研究のためにラサに留学し、伝統的なチベット仏教の勉学をすべて終えた。彼は知識人であり、当時のチベットにおける社会制度や仏教寺院制度に對してやや批判的であり、改革や近代化の必要性を訴える人物であった。彼も、いろいろな外国人の学者と出会ったことで自国の考え方について変化したと言える。

その後の経歴について少し触れてみると、一九三四年、ラサでインドのサンスクリット語学者であるラフル・サンクリテヤン（一八九三〜一九六三）と出会い、サンスクリット語文献を探すために南チベット方向に同行している。その後十二年間に、インド、ネパール、スリランカ、アフガニスタンなど、さまざまな国を訪れる学問的な旅を重ね、英語とサンスクリット語とパーリー語をマスターした。その後には、ロシアのチベット学者、ジョージ・レーリヒとも出会い、チベット仏教史である『ブルー・アンナズ (Blue Annals)』の翻訳を手伝っている。さらには、フランスのチベット学者、ジャック・バコーに對しては、敦煌の文献を読む手伝いをし、そこで彼自身もチベットの歴史について、短い著作を著している。また、スリランカとインドのブツダガヤに滞在した時には、アナガリーカ・ダルマパーラ（一八六四〜一九三三）という仏教改革者のことを多く耳にし、その人物の活動に憧れを抱いた。このことを契機として、インド・カルカッタのマハーボデイ・ソサエティ（大菩提会）に関わって活動し、そこで自身が著した仏教巡礼史も出版している。後の一九四〇年代にはインドのカリンポンに滞在して、チベットとチベット仏教の組織改革のために、若いチベット人たちと共にさまざまな活動を構想したと言われている。

こうした外国滞在中に、仏教と科学について、論文などのさまざまな著作をチベット語で著してチベットの友人に送付したり、新聞に寄稿したと言われている。彼は、特にスリランカの近代化を見た経験を踏まえて自国で

も改革は不可欠であると認識し、後にラサに戻ったが、志半ばで一九五一年に四十六歳で遷化した。

ちなみに彼については、英語とチベット語で、多くの研究が残されている。⁽¹³⁾

このような影響もあり、一九五〇年代のチベットにおいても、国家と仏教の近代化について、意見交換や活動を展開しようとする流れはあった。十四世自身も自伝の中で「認定されたすぐ後に、十三世の改革と近代化の活動に乗り出した」と記している。⁽¹⁴⁾しかし、チベット本土ではその機会も自由も得ることはできず、結局のところ、伝統的な寺院での基本的な仏教の科目や問答形式の勉強方法は、根本的には変わらなかった。従って、難民社会において環境や条件が整っているかは別として、自由な社会であるという意味においては、寺院の設備、寺院と国家の関係についても、改革は必要であると見なされ試みられてきた。具体的には、三大寺の中にも寺院に付属する高校までの教育施設を設け、少年僧侶もそこで英語、科学、数学などを学べるようなシステムを作っている。その上で、寺院の仏教学問に入るのである。

また、三大寺などの僧侶についても、これまでは口頭試験しかなかったが、亡命社会では筆記試験も設けられてきた。問答形式のゲシェーの試験を受けた後に、ゲルク派の筆記試験を課すようになったのである。従来の勉強方法では、対外的にチベット仏教と文化を伝えることができないし、共有することができない。近代ヨーロッパにおいては、研究成果は書いて発表することにより共感や反論を受け、成果を挙げていくからだ。

また、生活面でも以前とは異なり、できる範囲で僧侶たち自身が自立のために農作業を行ったり、寺院の中に食堂や書店、売店を開いてきた。完全とはいかないが、援助や布施だけに頼らずに自立的に寺院を運営できるように模索しているところである。

(2) 近代的な教育・研究施設の創設

◎ 中央チベット高等学校 (Central Institute of Higher Tibetan Studies)⁽¹⁵⁾

ネルー首相とダライ・ラマ十四世との意見交換により、男女僧俗の区別ない青年チベット人による仏教研究とヒマラヤの民族文化学習のために、一九六七年、サルナートに中央チベット高等学校が、完全なインド政府の支援のもとに創設された。生徒としては、毎年、チベットの四宗派から十人ずつと、ヒマラヤ各地の仏教徒の学生たちが入学できるようにになっている。高校卒業後に入学する近代大学の制度と同等である。仏教の勉強にあたっては、チベット語だけでなく、サンスクリット語、パーリー語、ヒンディー語を読解する力を付けることに重点が置かれた。また、般若学、中観学、論理学、阿毘達磨俱舍学、律学などは口頭ではなく、授業を受けて筆記する方法が採られた。さらに、卒業するためには試験を受けることと、論文を書くことが義務づけられた。科目としては、仏教学、社会学、語学、チベット文学などがあり、その中で特に興味深いのは、仏教学には三大寺とは異なる「インド仏教学(ギヤシュン)」と、「宗学(ランシュン)」という新しいシステムが作られたことである。従来のチベット寺院においては、一般仏教学と宗学の区別をほとんどしなかったためである。

この学校こそ、チベット仏教と文化に、西洋的な勉強方法を取り入れたという点において歴史的な変化をもたらした。かつてのチベットでは想像もつかない、近代という時代に乗った仏教の勉強方法を展開している。この教育システムは大いに成功し、一九八八年には大学となり、基本的にはインドの文化教育省に所属する施設と位置づけられている。ここにはインド政府から十分な支援が与えられた。さらに、チベット語とサンスクリット語の文献を豊富に所蔵する図書館を有し、サンスクリット語で消失してしまった経典を、チベット語経典等から訳し直す研究 (Sanskrit restoration works) も行っている。

ちなみに教師は、一九七〇年代から八〇年代にかけては、伝統的な寺院を卒業したゲシェーなど学位のある教師であり、その後には卒業生が務めている。

◎仏教論理大学 (Institute of Buddhist Dialectics)⁽¹⁶⁾

一九七三年に、ダラムサラに創設された。中央チベット高等学校とは異なり、僧侶だけのために創設された大学である。難民社会の高校を卒業した学生の中で、出家し、なおかつ仏教の勉強と実践を希望する若者たちが対象となる。伝統的な寺院のどこにも属さずに、インド大乘仏教とチベット仏教の学問的な研鑽を希望し、なおかつ近代教育も受けて英語や社会学なども生かしていきたいという学生のための施設である。仏教の勉強方法は問答形式で三大寺などと同様であるが、新たに筆記試験も義務づけられ、チベット語文法とチベット仏教史などの科目も加えられた。

この大学は、インド政府ではなくチベット亡命政府と亡命社会によって維持されている。伝統的な三大寺と、中央チベット高等学校との間に立つ新しい概念の施設であると言えよう。

この仏教論理大学と中央チベット高等学校の卒業生は、西洋社会にも対応できる語学力と、伝統的な仏教に関する知識と学歴があるという点において、亡命社会の学校や政府における新たな人材として囑望された。それ以前の亡命社会にはチベット人のための学校には高校までしかなく、近代大学は存在しなかった。従って、チベットの宗教、文化、語学はここでしか学ぶことができない。そのために、将来のチベット社会にとって理想的かつ貴重な人材が育つ場であると言えよう。

◎チベット文献図書館 (Library of Tibetan Works & Archives)⁽¹⁷⁾

外国人でチベット仏教、文化、語学に興味を持ち、英語で学びたいと思っている人たちのために、一九七一年にチベット文献図書館が創設され学習の機会を与えている。ここは、基本的にはインド政府の協力で作られた施設である。亡命時に持参した経典、仏像、文献などの保存と、チベット仏教や文化についての講義を英語で行っている。

さらに、チベット文献の中でも特に珍しい文献や、貴重な文献を閲覧することができ、外国の学者や研究者に對してチベット仏教や文化、歴史に関する情報を豊富に提供している。

また、亡命してきた人々から、チベットの寺院と仏教以外の文化や伝統行動の聞き取り調査を行い、記録している機関でもある。

五 外国のチベット学研究者との邂逅による近代化への影響

ダライ・ラマ十四世がインドに亡命し、その後亡命社会が形成され安定した後には、また新たな変化が見受けられた。それは、亡命社会の高僧や学者たちと、日本も含めた外国のチベット関連の学者たちとの間に、交流が生まれたことである。これは非常に新しい展開と言えるだろう。

一九五九年以前にも、チベットには多くの学者たちが入境を目指し、成功を果たした人物もあった。それは、ヨーロッパ、インド、そして日本の学者や探検者たちであったが、彼らにとつては積極的にチベットの文化、語学、宗教、美術などを研究するためには、あまり良い状態ではなかった。なぜなら、チベットは鎖国の方針を堅く守っていたからである。すなわち、入国には命がけであった。

その中で最初の人物としては、十九世紀のハンガリーの学者であるアレックス・コルス（一七八四～一八四二）が挙げられる。チベット語などの研究のためにヒマラヤの国々を旅して、ラダックにも長く逗留して大蔵経を研究した。彼は、国際チベット学の嚆矢であると言われている。その後一九二〇年代から三〇年代には、イタリアの学者であるジュゼッペ・トゥッチ（一八九四～一九八四）が、仏教や美術の探究のために、西チベットと中央チベットを旅してさまざまな文献を探し求めた¹⁸。そして、彼はチベット仏教に関する文献や、美術の文献について膨大な著作を残し、現代チベット学に大いに貢献した。彼こそ、後に、ナムカイ・ノルブや サムデン・カルメなどといった亡命社会の優秀なチベット学者を、イタリアにある自身の研究所に招いた人物である。日本人では河口慧海、多田等観もチベットに入り、チベット仏教を勉強して帰国時には大蔵経など多くの文献を持ち帰ることができた。またロシアの学者たちからもチベット文化、宗教の研究成果が挙げられている。

このような背景のもと、一九六〇年代から七〇年代にかけて、インドに定住している高僧と学者たちは亡命社会で自由とチャンスを探み、西洋の大学に教授や研究助手として招かれるようになった。ロンドン、パリ、ボン、ブタペスト、そして東京にも招聘される機会があった。こうした刺激や影響は、チベット仏教・文化についての興味と関心を西洋において増大させ、研究を希望する人々の増加にもつながった。

そしてチベット人自身の積極的な活動としては、カギユ派の一人の活仏であるチューギヤム・トゥンパ（二九三九～一九八七）が、一九六〇年にインドへ亡命し、オックスフォード大学で教育を受けた後、アメリカに渡り、コロラド州ボルダーのナーローパ学院などを拠点に多彩な布教活動・芸術活動を展開した。また、ニシマ派の高僧であるタルタン・トゥルクは、亡命後、バークレーにニシマ派の仏教瞑想センターを建立し、ダルマ・パブリッシングという出版社をも設立し、多くのチベット語経典を英訳した。そしてロックフェラー財団の

支援により、サキヤ派の高僧サキヤ・ダクチェンはシアトルのワシントン大学に招かれ、チベット語と文学、宗教について研究の機会を与えられた。¹⁹ また一九七〇年代には、ゲルク派の二名の僧侶、ラマ・イエシエとラマ・ゾパの熱意で「大乘仏教保存財団 (F P M T)」が設立され、世界各国で仏教の普及活動が行われた。このような人物達は、亡命チベット社会の僧院や文化施設の物理的土台を築くことにも大きな貢献を果たした。そして、さまざまな場でチベット学の研究が始められたのである。

一方、インドの亡命社会の僧院や研究所も、新たにチベット文献に関する書籍をたくさん出版した。それとともに、アメリカの学者であるジーン・スミスは、アメリカ議会図書館 (Library of Congress) のために、亡命社会においてチベット仏教や文化、歴史関係の書籍の出版活動に尽力した。²⁰ また日本でも東洋文庫などが、チベット仏教・文化の研究のために学僧や学者を招いた時期もあった。

このような国際的な刺激や影響を受け、それらが亡命社会に還元されたことは、チベット亡命社会の仏教・文化の研究において良い契機となり、また近代社会の状況を認識することもでき、チベット社会の近代化への大きな貢献になった。

また学問や研究分野だけでなく、今までチベットに縁のなかった一般の人々との出会いは、近代社会が必要とするスピリチュアリティを、チベット仏教などに見出して紹介するきっかけとなったとも言えよう。

六 まとめ

これまでの半世紀以上において、チベットとチベット仏教徒たちが、前例のない道なき道を行くような状況に置かれてきたことは事実である。その結果、ダライ・ラマ十四世が亡命した後、インドやネパールなどに

三十万人近くのチベット人たちの新しい社会や組織が作られた。そこでは人々の生活は安定し、近代教育を受けられることも可能で、亡命政府のもとに一国があるかの如くに機能している。これはインド政府をはじめとする皆さんの外国の援助団体等による協力と知恵の恩恵によるものであり、チベット民族は新しい歴史を体験している最中であると言える。

言うまでもなく、ゼロから新しい社会を築き上げるには、沢山の問題と困難に直面したが、チベットやチベット仏教徒にとつては、改善と近代化の流れに乗る契機となった。しかし、そうは言っても、これらはネパールやインドといった発展途上国での出来事なので、ヨーロッパや日本などでの近代化の概念と同等と言い得るかは、問題の残るところである。

チベット人とチベット仏教徒たちは、それまでの本土では、社会的にも宗教的にも保守的で変化を恐れる性質があったために、改革や近代化に戸惑いがあった。しかし、この亡命を契機としたために民主化と近代社会への仲間入りを、暴動や混乱なく果たすことができたと言える。

また、ダライ・ラマ十四世をはじめとして、インドという自由な国に亡命してきた三十万以上の人々が、特別な運命と責任を背負っている事も忘れてはいけぬ事実である。特別な責任というのは、チベット民族の依りどころとなる釈尊の教えを堅く守りつつ、社会を近代化していくことである。そのためには、仏教団体そのものも近代化していくことが必要であろう。つまり、千年以上もの伝統があるチベット仏教の教えと文化をこれからも守っていくことと、教団の施設や組織を合理的かつ経済発展した社会に適応させていくことである。経済発展を中心とした社会において、これからも伝統的なチベット仏教を近代化し続け、守っていくことは重要なことであると考える。なぜなら、この伝統的な仏教は、ヒマラヤの国々の民族の信仰と依りどころであるとともに、近代

社会の形成過程において、人々の物事の判断基準となっていくものでもあると思うからである。

また、チベット仏教は、ヒマラヤの国々にとつても共通の宗教文化と言える。近代化するということは、これらの国々にも大きな影響を及ぼすことにも繋がるであろう。

以上、今回の論文においては、さまざまな事情を説明しながら多方面にわたり解説してきたために、本題を詳細に論じ切れていない部分が残るが、今後も引き続き語っていくべきテーマであると感じている。

註

- (1) 『14人のダライ・ラマ』下：グレン・ムリン著、田崎國彦他訳、春秋社、p.307～308 参照
- (2) 『14人のダライ・ラマ』上：グレン・ムリン著、田崎國彦他訳、春秋社、p.100、& p.572 (訳注③) 参照。
- (3) The Dragon in The Land of Snows. - *A History of Modern Tibet since 1947*, by Tsering Shakya. Penguin Compass. (Introduction) p. xxviii-xxix.
- (4) A History of Modern Tibet, 1913-1951; Melvyn C. Goldstein, University of California Press, Berkeley, 1990, p. 23-24. Further it says : "The three monastics Seatsbelieved that they represented the fundamental interests of Buddhism and were obliged to preserve the religious values of the state.
- (5) "The Chinese claimed that the very purpose of their coming to Tibet was to develop it. So here, you see, there was no need for argument; we enjoyed a common principle." related the Dalai Lama. In Exile from the Land of Snows. *The first full account of the Dalai Lama and Tibet since the Chinese conquest*, by John F. Avedon, Vintage books, New York, 1986, p.41.
- (6) 一九七〇年代キト、難民キャンプの所在地名：
 ①Brylakuppe(Mysore) ②Mundgod(Karnataka), ③Hunsur(K.S.), ④Kollegal(K.S.), ⑤Bandhara(M.S.), ⑥Mainpat(M.P.),

- ⑤ Tezu(Assam) ⑥ Chandragiri(Orissa) ⑦ Bomdihla (A.P.) and ⑧ Solan (H.P.)
- (7) The Dragon in The Land of Snows. - *A History of Modern Tibet since 1947*, by Tsering Shakyra, Penguin, Compass, p.33-51
- (8) 『雪の国からの亡命』チベットとタラン・ラブ 半世紀の証言：シモン・F・マズドン著、三浦順子他訳、地湧社、p.140-149.
- (9) The eight big schools called as "The Central School for Tibetans" established by the Govt. of India under the administration of Central Tibetan Schools, between 1960 - 1965 were as follows : ① Mussoorie, ② Simla, ③ Dalhousie, ④ Darjeeling, ⑤ Kalimpong, ⑥ Panchamari, ⑦ Mount Abu and ⑧ Nursery School (Home) at Dharamsala (later it was turned into the name of Tibetan Childrens' Village).
- (10) 『雪の国からの亡命』チベットとタラン・ラブ 半世紀の証言：シモン・F・マズドン著、三浦順子など訳、地湧社、p.156-160.
- (11) 『雪の国からの亡命』チベットとタラン・ラブ 半世紀の証言：シモン・F・マズドン著、三浦順子など訳、地湧社、p.147.
- (12) 『チベット文化史』：D・スネルグロウヴ／H・リチャードソン著、奥山直司訳、春秋社、p.322-323.
- (13) The Biographical sketch of Amdo Gen dun Cho phe: (1) The Guide to India - *a Tibetan account by Amdo Gen dun cho phe* : by Toni Huber, Library of Tibetan Works and Archives, Dharamsala, 2000,p.219. (2) Buddhism and Science, by Donald S. Lopez, University of Chicago Press, Chicago, 2008, p.105-130.
- (14) My Land and My People, by Dalai lama, Potala publ. New York 1983, p.64-65
- (15) [http://www.indianetzone.com/14/central_institute_higher_tibetan_studies_\(chits\).htm](http://www.indianetzone.com/14/central_institute_higher_tibetan_studies_(chits).htm)
- (16) http://www.ibdindia.org/ibd_home.htm
- (17) <http://www.ltwanet/library/>
- (18) 『チベット文化史』：D・スネルグロウヴ／H・リチャードソン著、奥山直司訳、春秋社、p.379-380.
- (19) Tibet is my country. *Autobiography of Thupten Jigme Norbu, Brother of the Dalai Lama as told to Heinrich Harrer*, Wisdom Publications, London, 1960, p.255.
- (20) A Cultural History of Tibet, by David Snellgrove & Hugh Richardson, Shambhala, Boston, 1986, p.275-76.

参考文献

- Avedon F. John:
In Exile from the Land of Snows: Vinatage books, New York,
1986.
- Dalai Lama (xiv):
Freedom in Exile: *The Autobiography of The Dalai Lama*,
Harper Collins, New York, 1990.
- D・スネルグロヴ／H・リチャードソン:
『チベット文化史』奥山直司訳、春秋社、一九九八年
- グレン・ムリン:
『14人のダライ・ラマ』その生涯と思想、上下、田崎國彦など訳、
春秋社、二〇〇六年
- Goldstein M.C.:
A History of Modern Tibet, 1913-1951, University of
California Press, Berkeley, 1991.
- Huber Toni:
The Guide to India, *A Tibetan account by Amdo Gendun
Chophel*, The Library of Tibetan Works and Archives,
Dharamsala, 2000.
- ジョン・F・スベートン:
『雪の国からの亡命』チベットとダライ・ラマ 半世紀の証言:
三浦順子他訳、地湧社、一九九一年
- Richardson Hugh & Snellgrove David:
A Cultural History of Tibet: Shambhala, Boston & London,
1986.
- Tsering Shakya:
The Dragon in The Land of Snows, *A History of Modern
Tibet since 1947*, Penguin.
- Smith W. Warren:
China's Tibet, *Autonomy or Assimilation*, The Rowmand &
Littlefield, Lanham, 2009.
- 〈キーワード〉
チベット仏教近代化 亡命チベット社会 チベット仏教の現状

チベット亡命社会における仏教の近代化